

「養護性 (nurturance)」に関する一研究(2)

—— 妊婦と未婚学生の比較 ——

中西由里・栗津幹子*

A Study on Nurturance (2)

Yuri NAKANISHI and Mikiko AWAZU

I 問 題

我々は先の報告(中西・栗津, 1996)において、「母性」より広い概念である「養護性 (nurturance)」という概念を用いて、幼児を持つ母親と未婚の男女学生の養護性のあり方について横断的に比較検討をしてきた。この、「養護性」という用語は、女性に特有のものとのイメージを与える「母性」という用語に代わって提唱されているものである。現在では、「母性」についても「母性本能」という言葉に表されているような生得的なものではなく、育ち・育てられ・開発されるものという捉え方によって変わってきている(大日向, 1991)。ちなみに、大日向は「母性対父性」の対立ではなく、両者を統合した「育児性」という概念を提唱している。

養護性とは「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義される(Fogel, A. D., Melson, G. F. & Mistry, J. 1986)。それは生きとし生けるものに対する慈しみと育みの心と技能を指しており、広い年齢範囲の男性・女性に適用できる概念である。小嶋・河合(1988)は幼児・児童の養護性の発達についての研究を報告している。

小嶋(1991など)は、未婚の大学生女子における養護性の構成成分を分析して、その中心をなすのは、A)赤ん坊・子どもへの興味、B)子どもをうまく扱える自信、そしてC)積極的な養護的役割の受容であることを見出し、それと本人の社交性、母親像、父親像、これまでの対人的接触の経験との関係(ただし、その相関係数は低い)を報告している。これらの変数は、もともと女性が妊娠・出産の過程を辿り、また育児に関わっていく過程と関連するという想定で選ばれたものであった。すなわち、一方では養護性や子どもに対する意識や態度、対人関係の性質などは、妊娠・出産・育児の過程を辿る女性のあり方をある程度予測できると考えられる。しかし他方で、子どもを生む前に抱えている子どもに対する構えや子どもとの(予想した)関係と、実際に育児に関与しながらのそれとにはずれが生じる可能性があるし、また母親が必要とする社会的支援体制の性質・機能も変化していくと予想される。養護性という概念を中心に据え、それと関係する諸条件も含めて、出産・育児の過程における連続性と変容を本格的に調べた研究はまだきわめて少ない。

* 元人間関係学部非常勤講師

また、「養護性」という概念を用いると、親となる過程を人間の発達の初期から始まるものと考え、幼児・児童期の養護性の発達から、思春期、青年期の親になることへの準備性の発達、さらに結婚し、子どもを持って実際に親となったときの母親性とならんで父親性をも問題にする道を開く。

親準備性については、深谷・井上(1986)が、「ある個人に、情緒的にも態度的にも、そして知識的にも、親の役割を果たすために、十分なレディネスができていのかどうかを意味する語」として設定し、大学生を対象とした調査を行い、親準備教育の機会を青年達に提供することの必要性について述べている。

また、近年話題になっているペット等の小動物が心の機能回復に有効との知見(Yates, E. 1973, 村瀬1995など)を養護性で説明することも可能であろう。

先の報告(中西・粟津, 1996)では、未婚の男女学生の養護性のあり方が、性差のみならず、学生自身の専攻や日常生活での子どもとの接触の有無によって大きく異なっていることが明らかになった。本報告では、妊娠中の女性(妊婦)と未婚学生の養護性のあり方について比較検討することを目的とする(分析1)。また、各群を子どもが好きかどうかで分類し、各下位群の質的差異についても比較・検討することを目的とする(分析2)。

II 方 法

1) 調査用紙

調査項目は、女子青年の養護性について調べた小嶋(1991)が用いた調査項目を利用した。調査用紙の構成については表1に、具体的な質問項目については表2に示した(母親群にはこの46項目に対人関係に関する15項目をつけ加えた計61項目からなる調査用紙を用いた)。これは、先の報告(中西・粟津, 1996)で使用したものと同一のものである。また、この他に、被調査者の年齢や家族構成(核家族か否か)や日常生活における子どもとの接触の有無等についても回答を求めた。質問項目には、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の三件法で回答を求めた。

表1 養護性を測定する質問項目の構成

尺度の内容	肯定的な意識	否定的な意識
1. 赤ちゃん・子どもへの興味……12項目	8	4
2. 子どもをうまく扱える自信……6項目	4	2
3. 積極的な養護的役割の受容……6項目	4	2
4. 福祉活動への関心……4項目	3	1
5. 子ども時代の追憶……6項目	5	1
6. 動物に対する関心……3項目	2	1
7. 植物に対する関心……2項目	2	0
8. 母親像……4項目	2	2
9. 父親像……2項目	1	1
10. その他……1項目	0	1

表2 質問項目一覧

妊婦用	学生用	
1)	1)	赤ちゃんを見ても、別にかわいいとは感じない
2)	2)	幼児の相手をうまくやれると思う
3)	3)	小学生の遊び相手になれそうである
4)	4)	赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある
5)	5)	動物を飼うことには興味がない
6)	6)	幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる
7)	7)	小さい子どもの相手は苦手である
8)	8)	テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る
9)	9)	子どもの心の動きに興味がある
10)	10)	幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う
11)	11)	草花を育てることに興味がある
12)	12)	子どもはあまり好きになれない
13)		趣味で作品を一つ一つ増やしていくことに喜びを感じる
14)	13)	幼児の姿をつい目で追っていることがある
15)		近所に気楽に相談できる人がいる
16)	14)	子どものことよりも青年の生活と心理に興味がある
17)	15)	雨に濡れた迷い犬などを見るとかわいそうに思う
18)	16)	子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい
19)	17)	小さい子どもに頼られるとうれしい
20)	18)	遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる
21)		夫よりも私のほうが子どものことによく知っていると思う
22)	19)	捨てられた動物がどうなったかいつまでも気になる
23)	20)	保育所の前を通りかかると、中をのぞきたくなる
24)		子育てに関して実母に相談しようと思う
25)		子育てに関して夫の母に相談しようと思う
26)		人の世話が好きである
27)	21)	枯れかけている植物を見ると、気がかりである
28)	22)	小さい子どもの世話には自信がある
29)		小さい頃から「子ども好き」と言われていた
30)		「手作り」のものが好きである
31)	23)	自分の子ども時代の思い出はなつかしいものである
32)	24)	幼い子どもに接する職業に関心がある
33)		夫はよく私の相談にのってくれる
34)		夫は子ども好きである
35)		女に生まれてよかったと思う
36)		自分の母親のようにになりたい
37)		現在の自分に満足している
38)	25)	自分は良い母親を持ったと思う
39)		気楽に育児について相談できる友人がいる
40)		人からよく「世話好き」と言われる
41)	26)	出来れば自分も親となって子供を育てようと思う
42)	27)	子ども時代の歌を聞いてもなつかしいとは感じない
43)	28)	福祉方面の仕事に興味がある
44)	29)	母親は自分の気持ちをよく理解してくれた

- 45) 30) 将来、親になったときのことを想像することがある
 46) 31) 子育てにはいろいろわずらわしいこともあると思う
 47) 32) 親が自分にしてくれたことをいろいろ思い出す
 48) 33) 自分は子どもを育て、良い親になろうと思っている
 49) 34) 子どもに興味を持つのは幼稚な趣味のように思える
 50) 35) ボランティア活動には積極的に参加したい
 51) 36) 母親についてよい思い出があまり浮かばない
 52) 37) 子ども時代を思うとセンチメンタルな気分になる
 53) 38) 自分は親とは少し違った親になろうと思う
 54) 39) 幼い子どもを見て、以前の自分を思い出すことがある
 55) 40) 父親は自分をかわいがってくれたと思う
 56) 41) 将来、子どもをうまく育てられるか心配である
 57) 42) 障害を持つ人を援助する職業は自分には向かない
 58) 43) 以前に親と楽しく過ごしたときのことを思い出す
 59) 44) 自分は将来、我が子に慕われる親になれる気がする
 60) 45) 子ども時代に父親との接触は多くなかった
 61) 46) 子どもっておもしろい存在だと思う

2) 被調査者

妊婦群：愛知県A市の社会教育課が主催する妊婦向けの母親教室の受講生と愛知県B市のC総合病院産婦人科の受診者計248名である。今回の分析に使用した調査データは1992年から1993年にかけて回収したものである。

学生群：女子学生群は女子短大生100名と4年生大学生（共学）21名の計121名、男子学生群は4年生大学生（共学）83名である。学生のデータは1991年11月から12月にかけて回収された。それぞれの被験者の内訳については表3、4に示した。

3) 調査の分析方法

先の報告（中西・粟津，1996）では、尺度1「赤ん坊・子どもへの興味」、尺度2「子どもをうまく扱える自信」、尺度3「積極的な養護的役割の受容」について分析したが、妊婦165名を対象にした養護性項目の調査・分析において内的整合性の点で、安定して見

表3 被調査者（妊婦群）の内訳

	平均	範囲
年齢	27.88	19-44
子どもの数	0.38	子ども無し 176 1人 57 2人 11 3人以上 5
教育年数	13.45	9-22
家族人数	2.87	1-9

N=248

「養護性 (nurturance)」に関する一研究(2)

表4 被調査者(学生群)の内訳

男 女 別		学生の専攻	人数	平均年齢	範 囲
女子学生群	短大生	食物栄養	35	19.7	18-20
		養護教諭	34	19.7	
		英 語	31	19.5	
	4大生	情報・社会	21	19.5	
男子学生群	4大生	情報・社会	83	19.0	18-21

表5 尺度1「赤ん坊・子どもへの興味・関心」と尺度1, 2との相関

	尺度1	尺度2
①赤ちゃんを見ても、別にかわいいとは感じない(－)	.39	.33
②赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある(－)	.39	.49*
③幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.37	.25
④テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る	.51	.36
⑤子どもの心の動きに興味がある	.61	.42
⑥幼児の姿をついで追っていることがある	.55	.26
⑦子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい	.51	.38
⑧小さい子どもに頼られるとうれしい	.35	.34
⑨遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる(－)	.34	.26
⑩保育所の前を通りかかると、中をのぞきたくなる	.42	.32

(－)は逆転項目

表6 尺度2「子どもをうまく扱える自信」と尺度1, 2との相関

	尺度1	尺度2
①幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う	.49*	.41
②幼児の相手をうまくやれると思う	.46	.71
③小学生の遊び相手になれそうである	.38	.65
④小さい子どもの相手は苦手である(－)	.49	.80
⑤子どもはあまり好きにはなれない(－)	.53	.66
⑥小さい子どもの世話には自信がある	.38	.59
⑦小さい頃から「子ども好き」と言われていた	.35	.53

(－)は逆転項目

い出された尺度は1と2であった。また、それぞれの尺度内の各項目の各尺度との相関について検討した結果を表5, 6に示した。その結果、尺度1の②「赤ん坊の泣き声を聞くとイライラすることがある」の項目と、尺度2の①「幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う」の項目は、原案とは違う尺度とより相関が高かったので項目を入れ替えて分析することにした。この報告では、このうちの尺度1と2について報告することにする。

Ⅲ 結果と考察

1) 分析1：妊婦と未婚学生の養護性のあり方の検討

調査項目は表1に示したように10の尺度から構成されているが、そのうち内的整合性の面で安定して見いだされた尺度1 ($\alpha = .76$)と尺度2 ($\alpha = .85$)について比較することにする。この分析の際には、前述したように、尺度1、2内の質問項目の一部を入れ替えた。また、妊婦用の尺度2の項目のうち1項目は、学生用の質問項目には含まれていなかったため、それを除いた項目を分析の対象とした(この項目を尺度2Rとする)。尺度ごとの合計得点(逆転項目は換算した上で)を算出し、各群毎にその比較を行ったものを表7、8に示した。

表7 妊婦群と女子学生群の尺度1、尺度2Rの比較

群	尺度1	尺度2R
妊婦	16.482	7.700
女子学生	15.04	7.463
t	2.855***	0.663

*** $p < .005$

表8 女子学生群と男子学生群の比較

群	尺度1	尺度2R
女子学生	15.04	7.463
男子学生	10.25	5.614
t	8.66***	3.96***

*** $p < .0001$

尺度1「赤ん坊・子どもへ対する興味・関心」尺度2R「子どもをうまく扱える自信」とともに、肯定的得点の高い順に、妊婦、女子学生、男子学生であった。尺度1の妊婦群と女子学生群、女子学生群と男子学生群との得点間には有意差があった(それぞれ $t = 2.855$, $p < .005$, $t = 8.66$, $p < .0001$)。尺度2では、妊婦群と女子学生群 ($t = 0.663$, n.s.)では有意差がなく、女子学生群と男子学生群との間には有意差がみられた ($t = 3.96$, $p < .0001$)。これから子どもを産もうとする妊婦群が未婚男女よりも養護性の項目で高得点であるのは当然のことであろう。

尺度に含まれる項目が同一ではないので、単純な比較はできないが、先の報告(中西・粟津, 1996)で我々は、女子学生の場合、大学での専攻によって得点の高低があることを示した。すなわち、将来子どもと関わる職業に関連した専攻を選んだ者の方が全体に得点(この場合は肯定的な得点)が高いのである。今回の分析では、女子学生を専攻別に検討することは報告しなかったが、内訳をみると専攻によって多少の得点の差異はみられた(養護教諭養成コースの学生の得点が高い)。

2) 分析2 子どもへの感情と各尺度得点の分析

養護性のあり方は、一般論として「子どもが好きかどうか」によっても異なると想定される。そこで、質問12)「子どもはあまり好きではない」の回答別に、「子どもが好きではない」と回答した者(PC-N群と略す)、「どちらでもない」と回答した者、「好きである」と回答した者(PC-Y群と略す)の3群に分けて、尺度別得点について比較検討してみた。妊婦群のプロフィールについては表9に示してある。女子学生群のプロフィールは特に示

「養護性 (nurturance)」に関する一研究(2)

さなかったが、養護教諭養成コースの学生の中には「子どもが好きではない」と回答した者がいなかったことを報告しておこう。また、社会・情報系の女子学生に「子どもが好きではない」とした者が比較的多かった。妊婦群の中では、PC-N 群の年齢が PC-Y 群よりも高いが有意差はなかった ($t=1.21$, n. s.). また、学生群も同様に、女子学生で「子どもは好きではない」と回答した者 (FC-N 群と略す), 「好きである」と回答した者 (FC-Y 群と略す), 男子学生で「子どもは好きではない」と回答した者 (MC-N 群と略す), 「好きである」と回答した者 (MC-Y 群と略す) にわけてそれぞれ比較・検討することにした (表10参照のこと)。

妊婦群, 女子学生群, 男子学生群とも子どもが「好き」と回答したの方がそうでない者よりも, 「赤ん坊・子どもへの興味・関心」, 「子どもをうまく扱う自信」の両尺度において, 得点が有意に高かった (表11参照のこと)。

表9 妊婦群の子どもへの感情別のプロフィール

	N	年 齢	子どもの数	教育歴	家族人数
子どもが好きではない	16	28.6	0.18	13.2	2.68
どちらでもない	55	28.2	0.33	13.55	2.53
好きである	178	27.7	0.41	13.55	2.99

表10 各群の子どもへの感情別内訳

群	子どもへの感情	人数	尺度1の得点	尺度2Rの得点
妊婦群	好きではない	16	12.25 (5-20)	2.94 (0-8)
	どちらでもない	55	14.56 (4-20)	4.84 (1-8)
	好きである	178	17.46 (10-23)	9.0 (2-12)
女子学生	好きではない	10	6.2 (2-17)	1.5 (0-4)
	どちらでもない	24	11.1 (4-15)	4.5 (1-10)
	好きである	87	15.92 (2-20)	8.97 (2-12)
男子学生	好きではない	12	3.58 (0-9)	0.92 (0-3)
	どちらでもない	27	9.44 (2-15)	4.26 (1-9)
	好きである	44	11.11 (2-17)	7.73 (3-11)

表11 子どもへの感情と尺度1, 2の得点の比較

		好きではない	好 き	t	p
妊婦	S 1	12.25	17.46	4.225	.0001
	SR 2	2.94	9.0	8.8	.0001
女子学生	S 1	6.2	15.92	6.427	.0001
	SR 2	1.5	8.97	14.72	.0001
男子学生	S 1	3.58	11.11	7.27	.0001
	SR 2	0.92	7.73	13.9	.0001

次に各群毎に質的な検討をしてみよう。尺度1について、PC-N群はFC-Y群よりも得点が低いが ($t=2.618$, $P<.05$), MC-Y群とはほとんど差がなかった ($t=.633$, $n.s.$)。つまり、妊婦群で「子どもが好きではない」と答えた人は、女子学生で「子どもが好き」と回答した人よりは得点が低いが、低いとはいっても男子学生で「子どもが好き」と答えた人と同程度の赤ん坊・子どもへの興味や関心を持っているといえる。妊婦でも未婚学生でも「子どもが好きではない」と答えた人に共通しているのは尺度2「子どもをうまく扱える自信」の得点の低さであろう(妊婦群, 女子学生群, 男子学生群とも「好き」と「好きではない」との差は, それぞれ, $t=4.225$, $P<.0001$; $t=6.427$, $P<.0001$; $t=7.27$, $P<.0001$ であった)。

斉藤・塚田・高山(1994)や先の報告(中西・粟津, 1996)で幼児や子どもとの接触経験が母性や養護性に影響を与えていることが指摘されているが, 子ども一般への感情(好悪)と「子どもをうまく扱える自信」との関連が本研究から示唆された。子どもが好きではないから子どもの扱いに自信がないのか, 子どもの扱いに自信がないから子どもが好きではないのかはこの結果からは知ることができないが, 母集団が少ないのだけでも, 妊婦群で「子どもが好きではない」と答えた人の2割は既に自分の子どもがいる人であるので, 子どもとの接触経験の有無だけでは説明できない。因果関係が明らかではないのだが, 子どもが好きではないと答えた人(特に妊婦の場合), 近い将来必ず子どもと関わらざるを得ないのである。この人たちも子ども好きの未婚女子学生と同程度の「子どもへの興味・関心」を持ち合わせているのであるから, 子どもと対処する際の自信につながるような体験を積極的に持つことで, 彼女らのあり方を変えることが可能になるかもしれない。近年, 育児不安や育児への困難さや子どもへの虐待などが育児をめぐる問題として指摘されている(佐々木・高野・大日向ら, 1982; 花沢, 1992; 川井・庄司ら, 1993; 佐藤・菅原ら, 1994など)。川井・庄司ら(1993)は育児不安の因子として, 「不安・抑うつ感因子」と「育児困難感因子」を抽出しており, 「育児困難感」タイプの母親には母性性の発達を援助することを中心とした相談が有効であると指摘しており, また, 育児体験学習も有効な方法であると述べている。育児状況をめぐる様々な社会的支援体制の整備が急がれている現在, 妊娠中に「子どもがあまり好きではない」と感じている母親(候補生)への支援の一つとして子どもに対処する際の自信を育てることも有効な手段であろう。筆者らは養護性に関する研究の一環として妊娠中の養護性や対人関係のあり方と出産後のソーシャル・サポートに対する意識や実態に関する縦断研究も行っている(中西・粟津・小嶋, 1993, 粟津・中西・小嶋 1993)のでさらに, 研究を進め, 養護性の発達について明らかにしていきたい。

文 献

- 粟津幹子・中西由里・小嶋秀夫 1993 育児期の女性の心理に関する縦断的研究(3)―妊娠中の『養護性』や対人関係と出産後の社会的支援体制に関する意識との関連から―, 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, 307。
- Badinter, E. 1980 *L'Amour en Plus*. Librairie Ernest Flammarion. (鈴木晶訳 プラス・ラブ サンリオ 1981)。

「養護性 (nurturance)」に関する一研究(2)

- 井上義朗・深谷和子 1986 親になること：現代青年の子ども意識・親意識（小林登・小嶋謙四郎・原ひろ子・宮澤康人編「新しい子ども学 第2巻 育てる」），p71-94，海鳴社。
- Fogel, A. D. & Melson, G. F. 1989 マカルピン美鈴訳 子どもの養護性の発達（小嶋秀夫編「乳幼児の社会的世界」），170-186，有斐閣。
- Fogel, A. D., Melson, G. F. & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the Determinants of Nurture: A Reassessment of Sex Differences. (Fogel, A. D. & Melson, G. F. Eds. ORIGINS OF NURTURANCE, Lawrence Erlbaum Associates.) p53-67。
- 花沢成一 1992 母性心理学，医学書院。
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也 1993 育児不安に関する基礎的検討，日本総合愛育研究所紀要，30，27-39。
- 河合優年他 1992 看護学生の養護性，私人的研究会の発表資料。
- 小嶋秀夫・河合優年 1988 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究，昭和62年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書。
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味（小嶋秀夫編「乳幼児の社会的世界」），187-204，有斐閣。
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解（我妻堯・前原澄子編「母性の心理・社会学」医学書院），79-111。
- 村瀬嘉代子 1995 子どもの心理療過程に登場する動植物（「子どもと大人の心の架け橋—心理療法の原則と過程—」金剛出版），94-109。
- 中西由里・粟津幹子 1996 「養護性に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較— 椋山女学園大学研究論集，第27号，「社会科学編」，9-18。
- 中西由里・粟津幹子・小嶋秀夫 1992 育児期の女性の心理に関する縦断的研究—妊娠中の「養護性」と「対人関係」に関する意識の分析を中心に— 日本発達心理学会第3回大会発表論文集，119。
- 中西由里・粟津幹子・小嶋秀夫 1993 育児期の女性の心理に関する縦断的研究(2)—出産後の社会的支援体制に関する意識について— 質問紙の作成—，日本発達心理学会第4回大会発表論文集，306。
- 大日向雅美 1982 母性を問い直すとき（佐々木保行・高野陽・大日向雅美・神馬由貴子・芹沢茂登子著「育児ノイローゼ」），132-154，有斐閣。
- 大日向雅美 1988 母性の研究，川島書店。
- 大日向雅美 1991 a 母性をめぐる現状と課題（我妻堯・前原澄子編「母性の心理・社会学」），1-30，医学書院。
- 大日向雅美 1991 b 「母性／父性」から「育児性」へ（原ひろ子・館かおる編「母性から次世代育成力へ」），205-229，新曜社。
- 斎藤益子・塚田トキエ・高山巖 1994 母性意識に関する研究（第2報）「未婚女性の母性意識」とその形成に影響する因子—母親・弟妹・幼児との関わりから— 母性衛生35(1)，38-44。
- 佐々木保行・高野陽・大日向雅美・神馬由貴子・芹沢茂登子 1982 育児ノイローゼ，有斐閣。
- YATES, E. 1973 SKEEZER Dog with a mission, Harvey House. (諸岡敏行訳「子どもたちの心の病を治した犬」，草思社，1991。